



青少年赤十字だより 第34号

JRCとやま



富山県青少年赤十字指導者協議会
会長 高信智加子

(射水市立射北中学校長)

八月七日、八日。一泊二日のリーダーシップ・トレーニング・センターに初めて参加させていただきました。勤務校の教員や生徒に参加を促しているのに、どんな活動を開催しているのか、自分が実際に体験してみないことには語ることができないと思つたからです。

一日目、児童・生徒は初めての仲間

と過ごす活動に緊張の面持ちで集まつてきました。開会式後、掲示板の指示で「国際人道法」「V・S（ボランタリーサービス）」等の講義、「救急法」「点字」「手話」「ポスターづくり」等の実技研修。そして、二日目のフィールドワークとわずか一日間ではありますが、びつしりと活動ワークが企画

され、その一つ一つを同じホームの仲間と協力し体験していきました。最初は同じ学校同士で集まりがちだった児童・生徒も活動を重ねるうちに、自ずとホームで集まるようになり、互いのよさを認め合っている姿から、児童・生徒の順応性と意識の高さに驚きました。

本校では、トレーニング・センターに参加した生徒が生徒会長や生徒会役員となり、PTAと連携して地域防災を考える全校集会を企画しました。日本赤十字社富山県支部の方には、事前に生徒会役員及びPTA役員の方に対し、講義や活動の手順等の打合せも行つていただきました。全校集会では、

学友会毎にグループとなり、自分の住む地域の拡大地図に危険な場所、避難できる場所をシールで色分けしていくます。能登半島地震のとき、多くの生徒が避難した経験から、「この辺は古くて崩れそうだから、きっとこの道は通れなくなる」「この神社の鳥居も崩れるかもしれない」と、有事を想定し、真剣に考えることができました。保護者の方々も各グループに入り、「能登半島地震のときは、この道は渋滞したよね」「ここのお宅はおばあちゃん一人暮らしだよね」とアドバイスをくださいました。

この大がかりな企画をPTAも巻き込んで実践できたのは、日本赤十字社富山県支部のご協力のおかげです。そして、トレーニング・センターで「無関心は人道の敵」と学んできた生徒達が自分の住む地域のためにできることは何かと考え、企画・実践したこと改めて頼もしさを感じました。

終わりになりましたが、本年度、青少年赤十字活動に対しご支援、ご協力いただきました富山県教育委員会、青少年赤十字賛助奉仕団をはじめ、関係各位に心より感謝申し上げるとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

青少年赤十字活動研究会

1月28日(火)、富山県総合教育センターにおいて、「令和6年度青少年赤十字活動研究会」を県教育委員会と共催で開催し、県内の小・中・高等学校等教員58名が参加しました。ここに、当日の講演及び実践発表の概要をお伝えします。

〈第一部：講演〉

「赤十字防災セミナー ひなんじょ たいけん」

日本赤十字社富山県支部

事業推進課長 林 信宏

本日のテーマは「赤十字防災セミナー」です。日本赤十字社では平成27年から取り組みをはじめ、一般の方々に対する普及は平成29年度から進めてきました。ご承知のとおり、富山県には神話がありまして、立山が守ってくれているからひどい災害は来ないと思っている富山県民も少なくあります。1年前の能登半島地震を受けて、今年度は各地域や団体等から防災セミナーに関する問い合わせや開催依頼を多くいただきました。支部職員だけでは対応できなくなり、昨年秋からボランティアの方々のファシリテーターや指導者の養成を行い、赤十字救急法等指導員・赤十字奉仕団員・JRC指導者等約50名が防災教育事業指導者養成研修を修了されました。

本日は、学校における防災教育の普及に役立てていただければと思っています。小・中・高等学校等それぞれの校種で様々な取り組み方があると思いますが、本日は防災セミナーのカリキュラムの1つである「ひなんじょ たいけん」を体験し



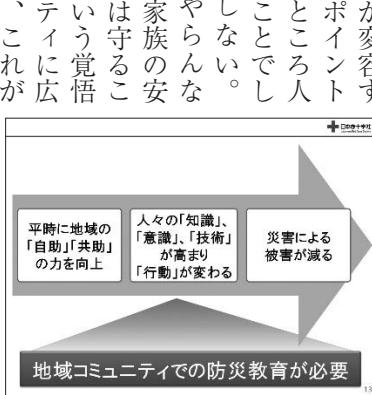
14年前の東日本大震災では22、325人の死者・行方不明者の92%は津波によるものでした。30年前の阪神・淡路大震災では6、434人の方が亡くな

りました。東日本大震災など過去の災害からの教訓を踏まえ、将来発生が予測される大規模災害に備え、地域住民の方々が自らの命を守り、被災に伴う心身の苦痛を軽減することを目的に、防災教育事業（赤十字防災セミナー）を実施しています。東日本大震災など過去の災害からの教訓を踏まえ、将来発生が予測される大規模災害から人々の命を守るために、地域コミュニティにおける「自助」と「共助」の力を高める防災教育が極めて重要です。赤十字防災セミナーでは、私たちが住んでいる街で災害が発生した際に予想される被害や救助活動、避難生活動などの課題を具体的にイメージしながら、命を守るさまざまな方法を地域に密着した形で学べるようにしています。

ははじめに、赤十字防災セミナーの概要についてご説明します。日本赤十字社では、今後発生が予想される大規模災害に備え、地域住民の方々が自らの命を守り、被災に伴う心身の苦痛を軽減することを目的に、防災教育事業（赤十字防災セミナー）を実施しています。東日本大震災など過去の災害からの教訓を踏まえ、将来発生が予測される大規模災害から人々の命を守るために、地域コミュニティにおける「自助」と「共助」の力を高める防災教育が極めて重要です。赤十字防災セミナーでは、私たちが住んでいる街で災害が発生した際に予想される被害や救助活動、避難生活動などの課題を具体的にイメージしながら、命を守るさまざまな方法を地域に密着した形で学べるようにしています。

り、77%は建物の倒壊等による圧死でした。日本赤十字社の統計では、地震の規模が大きくなればなるほど、公助が行き届かなくなります。新潟県中越地震の際には発災から48時間の間に日赤救護班が小千谷市に集結し、1日平均108人の患者を取り扱いましたが、阪神・淡路大震災では63人、東日本大震災では13人でした。規模が大きくなればなるほど、被災地にアクセスができなくなることが明らかであり、発災直後に外部からの支援で救えるいのちは少なくなるといえます。東日本大震災の際、釜石市の児童・生徒約3千人が津波から避難し、生存率は99.8%、「釜石の奇跡」と呼ばれていますが、これはまさに「釜石の教育」といえるのではないでしょうか。

今後想定される大規模地震、南海トラフ地震は30年内に70～80%といわれており、歴史的には150年の間隔内でほぼ100%発生するのではないかでしょう。また、気候変動などにより大雨・豪雨も増えています。令和5年度は7月の大震災と、年が明けた1月1日の能登半島地震で富山県に2回も災害救助法が適用されました。平



防災セミナーの目指すところです。防災セミナーに参加して、防災・減災に対する知識・技術を学ぶ。これが自助の力の向上につながります。そして、災害発生時の応急対応にあたる地域の防災リーダーの重要性です。リーダーが育成されることによって、さらに互助の力が向上し、災害から多くの人々の命が守られることがあります。本日は「ひなんじよたいけん」を体験してもらいます。ですが、研修・管理者向けのものは、静岡県が開発した避難所運営ゲーム（HUG）というシンプルなゲームがあります。それを基にして日赤は被災者目線、避難者目線での自助・互助につながるようなカリキュラムをつくりました。所要時間はだいたい1時間半で、東京本社は2回行なうことを行なうことは大変です。なぜ2回かというと、1回目でうまくいかなかつたけれど、2回目やつたときには色々な知識が増えてうまくいったという成功体験を体感してほしいからです。

「おうちのきけん・家具安全対策ゲーム」については、おうちのなかの危険、まさに家具のことです。震度6になつたら、家具が飛んできます。富山県は震度5でしたが、震度6でしたら潰れる家もあつたかと思います。自分のおうちのなかのことを想像するために、ワークシートに自分の家の家具の配置などを書いてみて、児童・生徒の場合は隣の人と見せ合いをすることで、さらに気づきが増える様子もありました。子どもたちに防災セミナーを普及して一番良いことは、おうちのひとに話すことで、大人の行動変容につながりやすいということだと思います。

エヌガラフローは、災害体験者の「語り」を読み進めることでその時の思いを追体験するといふもので、小学生には少し難しいかと思いますが、

文章を読んで共感するといったことがある程度できるようになると、想像力を大きく膨らます現実的な災害の追体験を得られるということでおすすめのカリキュラムです。災害状況については、死者数など数字では知っていますが、現場の感情を聞く機会はありません。体験した人達の語りからいろいろと気づいたり、考えたりすることができるエスノグラフィーを通して災害のイメージが明確化でき、どのエピソードにもいろんなリーダーがいることがわかります。災害初期はぐいぐいひっぱるリーダー、避難所に入つてからは取りまとめ型リーダーが必要であることが伝わってきます。内容は実際の地震・津波・土砂・大雨災害で、体験者の語りを聞いて、共感したところに線をひいていき、終わつた後に5～7人のグループで共有し、他の人の見方や自分の観点などを意見交換するなど、グループワークを含め60分程のカリキュラムです。

災害図上訓練（DIG）は、自分の地域の地図を用意し、防災上の資源や危険箇所を把握・理解し、個人や地域での防災対策の実践につなげます。昨年11月に射北中学校で全校生徒と保護者が40の住んでいる地域ごとに分かれてのグループワークを生徒会メンバーの進行のもと実施しました。自分たちの地域の特性であつたり、防災の資源であつたり、住民の特徴の把握なども減災につながります。大判地図の作成が必要ですが、自分たちの地域での様々な危険などに気づき、防災について考え、おうちのひとと共に備えを実行する、青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」にリンクできるカリキュラムです。

以上が赤十字防災セミナーのカリキュラムの紹介でした。それでは、ひなんじよたいけんをはじめましょう。

ひなんじよたいけん

・ 準備品 時間 90～100分

- ・ 筆記用具（参加者）・マジック3本・コピー用紙（A3・2枚、A4・5枚）（グループごと）
- ・ パソコン・プロジェクター・スクリーン
- ・ ゲームのセットは日赤が準備
- ・ 1グループ5～7人

○ 大地震における避難所生活の一部をイメージしたカードゲームを通して、避難所運営者ではなく「避難者の目線で心がける事柄」のように、避難所での「自助」「共助」の力の向上を支援することを目的としています。

○ 次々に来る避難者世帯には、それぞれの事情があり、中には配慮が必要になる方もいます。その中で、避難所の環境を考えたり、ルールを分かりやすく掲示・伝達したりすることをグループで考えることで、新たな気づきが生まれます。

○ 大勢での避難所生活では、他者への寛容さやルールを守ることの大切さ、普段から地域の人たちと顔見知りであることなど、平時から心がけておくことが重要であることがわかります。

様々な災害は全て違います。集まる人もその時その時で違います。最初からすべての状況はわからず、多種多様でひとつのことでの統制は難しいです。ひなんじよたいけんを通して、管理者としての目線だけでなく、被災者・避難者としてどんな目



線が必要かということを理解していただけたのではないでしょうか。避難者はお客様ではなく、避難所内の生活環境を整えるため自ら行動し、感染対策を徹底し、運営ルールを守ることが大切で、互いに協力し合うことが必要だと感じられたのではないかでしょうか。

〈第2部・実践発表〉

「地域との関わりを通して育む豊かな心」

（赤十字奉仕団との協働的な活動から）

富山市立四方小学校 校長 松村 英樹

災害緊急時炊き出し訓練やひとり暮らし高齢者宅訪問、NHK海外たすけあい募金など、地域住民（赤十字奉仕団）と共に活動することにより、地域の方の防災意識の高さに触れ、奉仕の重要性を感じることができました。また、地域の方との触れ合いが深まっていき、子供たちは地域の一員であることを実感し、郷土愛が育まれていきました。地域のお年寄りと交流する機会をいただいたことで、お年寄りとの関わり方を考え合うきっかけとなり、介護サービス施設訪問へと発展させお年寄りとの心の交流が生まれ、役立つ喜びを実感す

「思いやりの心をもち、

共に支え合つて生きようとする児童の育成

氷見市立窪小学校 校長 指崎 邦久

挨拶運動やアルミ缶回収、落ち葉掃きボランティア、保育園訪問などを実践し、委員会活動や総合的な学習の時間において、目当てをもつて活動を行うことで、思いやりの心をもち、共に支え合つて生きることのよさに気付く児童が増えています。

「地域との関わりやボランティア活動を通して、生徒一人一人の豊かな心を育む」

砺波市立庄西中学校 教諭 西澤 実

福祉施設の清掃や学校の周りの清掃、定期的な地道清掃、回収活動（アルミ缶、ベルマーク）などを実践しました。福祉施設の清掃や学校の周りの清掃については、毎年多くの生徒が自主的に参加しており、ボランティア意識の高まりが感じ

上学年を中心とした活動が多いので、下学年にも活動の意義について知らせたりよさを広めたりすることで、全校的な取組になると共に上学年の意識も高まると考えられます。

「豊かで創造性に富み、

主体的に活動する生徒を育てる」

魚津市立東部中学校 教諭 山岸 駿

人権週間や東中ライトアップ作戦、挨拶ボランティアなど、実践の多くは生徒会役員会や委員会、学級代表が主体となってアイデアを出し行つたものです。そして、実際の活動には多くの生徒が参加しています。役員の生徒が積極的に声掛けをした成果もありますが、参加生徒が活動を楽しんだり成就感を味わつたりしたことで、次の活動への意欲につながつたり、生徒会の一員であるという意識が高まつたりしたようです。生徒会役員等のリーダーによる企画に、多くの生徒が積極的なフォロワーとして協力することで、学校全体がよりよくなるだけでなく、生徒自身が成長することができます。役員の生徒が肯定し合い、人間関係がよくなつたりしています。今後も、様々な取組を企画・運営していきたいと思います。

青少年赤十字研究会に参加して

（令和7年1月10日（金）に、「令和7年度青少年赤十字研究会」が日赤本社にて開催されました。）



西部教育事務所
主任指導主事 福山 晓雄

全国から指導主事等が参集する青少年赤十字研究会に参加しました。

文部科学省 菅野和彦 初等中等教育局視学官の講義では、学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会の最新の内容にも触れられ、学校教育と青少年赤十字の関連について学びました。

愛知教育大学附属岡崎中学校 手島 英樹 副校長からは、青少年赤十字の多様な実践活動についてお聞きしました。中でも、防災教育の実践が心に残りました。県内の小中学校でも、能登半島地震を機に、総合的な学習の時間のテーマとして防災教育に取り組む学校がみられます。人や地域とのつながり、日頃からの備えや、非常時の避難シミュレーション等、赤十字の諸活動や提供されている防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」はとても有効です。また、青少年赤十字の態度目標「気付き・考え・実行する」は、児童生徒のリーダーシップを育むために、分かり

られました。自分たちの活動はどのように役に立っているのか、どんな意味があるのかを生徒が実感するための手立てを工夫し、さらにできることを考え、実践していくとする意識を高めていきたいと思います。

やすく示唆のある合い言葉となります。分科会でも、避難訓練と防災教育を関連付け、その際、赤十字と連携した活動を取り入れたことで、子供たちの防災意識を高めることができたと、いう具体的な事例を伺いました。今回学んだことをぜひ県内の小中学校に広めていきたいと思います。



射水市立大島小学校

教諭 磐部 光志

（令和6年5月31日（金）～6月2日（日）に、「令和6年度青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター指導者養成講習会」が国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催されました。）

リーダーシップ・トレーニング・センター

指導者養成講習会に参加して

各都道府県の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター（以下、トレセン）の指導者にそれぞれの活動内容を伺つたり学校現場で生かせる内容を話し合つたりしながら、赤十字活動と学校教育の関わりについて考える機会をいただきました。



リーダーシップ・トレーニング・センター ワーキング・センター集

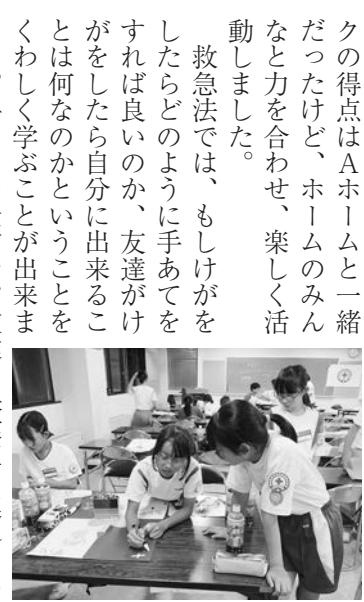
（小学6年生 A・一さん）

教育も目指す子供の姿は同じだということです。態度目標である「気付き」「考え」「実行する」は、日頃の学習課程の中の「課題を明らかにする」→「解決方法を考える」→「解決に向けて取り組む」というプロセスと相似しています。また、ボランタリー・サービスの精神は、現状何が求められるかを考える活動であり、学校での係活動や委員会

県内の青少年赤十字加盟校より小・中・高等学校別に参加者を募り、青少年赤十字のリーダー養成を目的として、毎年夏休みに開催しています。今年度は、8月7日（水）～8日（木）に、富山県砺波青少年自然の家にて開催し、県内の小・中・高校生66名が参加しました。救急法やフィールドワーク、手話、ワークショップなどの様々なプログラムに取り組み、新しく出会った仲間とともにリーダーシップを学びました。

リーダーシップ・トレーニング・センター

活動等の課題や現状をもとにしてより良い生活を送るためにできることを提案し、取り組むことと重なるものがあると感じました。各学校から数人だけが参加するトレセンという環境だからこそ自分の殻を破つて活躍できる子供たちがいるよさやJRCの精神を学び、人・世界・災害のことに関心をもつきっかけづくりを行う価値を実感できました。今回の学びを糧にして学校現場やJRC等、多くの場で子供たちが成長できる環境づくりに努めたいです。



（中学1年生 Y・Nさん）私は「青少年赤十字」について何も知りませんでした。初めは、「困った人を助けるボランティア」のようなものだと思っていました。トレセンが終わつた今でも3分の1も理解できていないと思いますが、この2日間を通して学んだことは、私のこれから的人生にとってとても貴重な存在だ

クの得点はAホームと一緒にだつたけど、ホームのみんなと力を合わせ、楽しく活動しました。

救急法では、もしけがをしたらどのように手あてをすれば良いのか、友達がけがをしたら自分に出来ることは何なのかということをくわしく学ぶことが出来ました。手あての仕方や、友達を保健室に連れていくときのやり方など、救急法のことを学んで「大事なことなんだな！」や「自分に出来ることをやつてみよう！」と考えました。

ポスター作りでは、私たちのテーマは、「人道」にしました。苦しみや悲しみがある人にいつか幸せ、安心して健康に過ごしてほしいという「願い」がこめられていて、みんなで人道にあつたデザインにしました。みんなにもっと苦しみの無い、平和で健康な世界になるように考えてほしいと思いました。

二日間、トレセンでみんなで学んだことがたくさんあります。トレセンのみ力が知れたら、赤十字の意味がくわしく分かりました。これからも先生の見通しをもち、リーダーシップを学校でも発揮して、自分からチャレンジしていきます。

令和7年度 トレセン開催の お知らせ

令和7年度は8月6日㈬から7日㈭までの日程で、富山県砺波青少年自然の家を会場に開催する予定です。開催案内は、5月中旬に加盟校にお知らせします。たくさんの学校から児童・生徒の参加並びに先生方のご協力をお待ちしています。

私が知らないことで多くの救えなかつた犠牲者がいると思うと胸がいたみますが、これから「赤十字」の存在を世に広めていくことで、罪のない命を救うことができると思います。「気づき、考え、実行する」を上手にできるようにはなれませんでしたが、私の中の人道の敵に「気づく」ことができただけでもよかったです。

急救法や手話は「赤十字」よりは身近な存在ではありましたがあつたが、まだまだ無関心な部分も多くあります。トレセンを通して少しでも「気づき」、自分で「考え」、仲間とともに「実行する」ことができうれしかつたです。学んだことを生かし、「いいつか」に備えておけるようにがんばりたいです。私が教えてくれた赤十字の皆様、本当にありがとうございました。



と思います。

このトレセンで私の中の

「赤十字」の存在はとても大きなものになりました。

（高等学校青少年赤十字活動のリーダーを育成するため、3月22日（土）～3月26日（水）の5日間、山梨県にて「青少年赤十字スタディー・センター」が開催されました。富山県からは、令和6年に高等学校リーダーシップ・トレーニング・センターを修了した2名が参加しました。）



南砺福野高等学校

私はリーダーとなつて活動しようとしても、人と協力して活動することがうまくできず悩んでいました。そんなときにはこの研修について知り、これに参加することで「自分の意見を持ちつつも、メンバーの意見を尊重する。」「自分一人でしようとせず、メンバーで役割分担をする。」という、二つのことができるリーダーになれると考え参加しました。

この研修で特に心に残つたことは、全国からの知らない人たち80人の中で、なかなか馴染めませんでしたが、ファイードワークをきっかけに仲を深めることができ、その後の活動をスムーズに進めることができ、やはり班で活動するのならば、仲が良い方が楽しむことができる分かたことです。また、世界の情勢についてです。自分には当たる前の幸せな生活は、とても特別なものだと感じました。戦争・紛争によつて多くの人が苦しんでいる現実に、自分には何ができるのだろうか、と真剣に考えていました。夢を叶えることができない人や、平和な日常が突然終わりを迎えてしまつ

スタディー・センターに参加して



新川高等学校

私はJRCスタディー・センターに参加して、赤十字の意義を知り、新しい友人を得ました。初めは4泊5日の長い研修と聞き、集団生活に苦手意識のある私は「長い時間を知らない人と過ごす、しかもずっと研修なんて大変だろう」と考えていました。全国の各都道府県から集まれば、習慣も方言も違う人たちで溢れしており、実際に現地について少しの間はこのままやつていてけるのかと考えていました。

しかし、実際に一日過ごしてみればちゃんと自己紹介などを経て、互いの県の方言などの話で盛り上がるなど楽しく過ごせました。同じ班の人や部屋の人とは特に仲良くなることができて、研修中も仲間に頼り楽しく真剣に学習できました。私が今回の研修で強く学んだのは赤十字の理念「人道と中立を大切に」です。確かに、今回の研修だけでもたくさんの人の人道的な優しさに助けられ、話し合いなどの場面では皆が一步引いて全体を見渡しているような、中立の立場を意識した会話をしました。

人と向き合っていく上で、今後も活かしていくべきです。

た人など、世界には私が助けたいと思う人がたくさんいるのだと感じました。そのためにまずは戦争・紛争を終わらせる必要があります。

この研修で私は、今の自分を知り、高めることができたと思います。この研修で得た学びと能力を活かして、まずは自分の周りで苦しんでいる人たちを助けられるように歩みを進めたいです。

赤十字防災セミナーの様子

令和7年3月7日、青少年赤十字加盟店である高岡第一高校において、「赤十字防災セミナーひなんじょ たいけん」を開催しました。1年生と教職員約70名が参加し、避難者等に見立てた70枚のカードと、避難所に見立てた平面図を使用するカードゲームを通して、避難所で起こる様々な出来事を疑似体験し、対応策を参加者同士で考え、避難所における必要な知識を学びました。

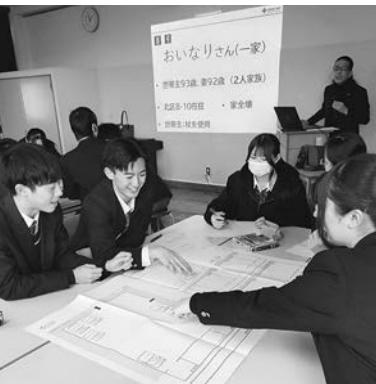
〈参加者の声〉

ひなんじょ たいけんを通して一番に実感したのは、避難所という限られたスペースでの生活の困難さです。大人数での共同生活となるためプライバシーの確保が難しく、全員が安心して避難できる環境を作るのは大変だと実感しました。物資も限られた数しかなく、誰にどのように配布するのかなど、難しいことだらけで実際に災害が起きてしまったときの対策を今のうちから考えておく必要性を感じました。次々と避難者が来る中で、どう対応するか、班で意見を出し合いかがら決めるのはとてもいい経験になりました。



ました。今回の防災セミナーで、避難所の現実的な課題と対策について深く考える機会となり、自身の防災準備を見直すきっかけができてよかったです。

今日の防災セミナーに参加して、避難現場のみならず社会において様々な配慮が大切であると改めて感じました。配慮といつても、高齢者や障がい者に対して何でもお世話をするのではなく、自分でできるところは自分で、できないところはサポートするという感じで寄り添うことが大切だと学びました。また、その方々の気持ちを第一に考え、自尊心を傷つけずに活躍の機会をつくってあげることが大切だと知ることができました。自宅に防災リュックはありますが、そこに簡易トイレはないため、災害に備えて両親と相談して購入を検討したいです。加えて、ハザードマップをもとに、あらゆる災害が起こったことを想定して、その対応策を家族で話し合いたいと思います。



**令和7年度実施予定の事業紹介
—青少年赤十字国際交流事業—**

当事業は、国内外の青少年赤十字メンバーが交流を深め、JRCの実践目標の一つである「国際理解・親善」を促進することを目的として、隔年で開催されています。直近では、平成30年度にマレーシアJRCメンバー2名が富山を訪れ、6日間滞在しました。マレーシアメンバーは、滞在期間中、県内のJRC加盟店を訪問し、授業や交流集会に参加する等、日本の学校での学習や文化を体験しながら学びました。令和6年度は7年ぶりに海外青少年赤十字メンバーを富山県支部で受け入れる予定です。詳細は、別途お知らせいたしますので、青少年赤十字国際交流にぜひご参加ください。

令和7年度JRC活動計画

3月	1月	11月	8月	7月	6月	5月
青少年赤十字活動研究会（富山市） 教職員を対象に、広く青少年赤十字活動を学び、 普及することを目的とした研究会です。 高校生対象 スタディー・センター（山梨県） 高等学校青少年赤十字活動の中心となるリーダーの養成を図ります。	青少年赤十字国際交流事業（日赤県支部・本社） 青少年赤十字研究会（日赤本社） 指導主事対象	リーダーシップ・トレーニング・センター（砺波市） 県下小・中・高等学校の青少年赤十字メンバーが 集まり、共同で生活する体験学習です。チャイム や指示がないため、自分で考えて行動することに よって、参加者の自主性を育てます。	全国指導者協議会総会（日赤本社） 全国賛助奉仕団協議会（日赤本社）	第3ブロック指導者協議会長及び支部担当者研究会 トレーニング・センター指導者養成講習会（東京都） （長野県）	トレーニング・センター指導者養成講習会（東京都） （長野県）	指導者協議会 理事会・総会（日赤県支部） 令和7年度 活動実践校指定

青少年赤十字への加盟について

青少年赤十字は、学校教育の場に組織され、教員が指導者となつて、児童・生徒とともに活動に取り組みます。

青少年赤十字に加盟されると、定期刊行物や資材・教材の無償提供、指導者対象の講習会に関する案内、小・中・高等学校の青少年赤十字メンバー対象のリーダーシップ・トレーニング・センターに関する案内等がありますが、「これをしなければならない」といった義務のようないふりはありません。地域や世界の人々の平和や福祉に貢献するような活動を、学校の裁量で自由に行うことができます。なお、加盟登録する上で、経費は一切かかりません。

各学校の教育効果を高めるため、ぜひ青少年赤十字をご活用ください。

令和6年度 新規加盟校

滑川市立西部小学校

校長 植名千里

学年加盟

不二越工業高等学校

校長 戸田雅規

部活動加盟



発行・編集

富山県青少年赤十字
指導者協議会
日本赤十字社富山県支部

〒930-0821 富山市飯野26-1
TEL076-451-7878 FAX076-451-6872
<https://www.jrc.or.jp/chapter/toyama>

青少年赤十字加盟校状況（令和7年3月31日現在）

校種	校数	メンバー数
幼稚園・保育園	13園	1,133名
小学校	136校	25,978名
中学校	73校	22,869名
高等学校	4校	411名
義務教育学校	16校	2,031名
高等支援学校	5校	192名
特別支援学校	247校	52,614名
計		